はじめに

　スルタンアブデュルメジド１世の７番目の娘であるレフィア・スルタンは、１８４２年２月７日夜ベシクタシュ宮殿で産声を上げた。母はアブデュルメジド１世の第二婦人ギュルジェマル・ハヌンである。彼女の類い希な容貌はアブデュルメジド１世の主治医であるスピッツァーに、床に伏してヴェールを取った彼女の顔を見て、「こんなに美しい顔を見るのは生涯で初めてだ。」と言わしめる程であった。残念なことにレフィア・スルタンは母のような美しさを持たなかった。ギュルジェマル・ハヌンは１８４０年にファトマ・スルタンを、１８４４年にレシッド・パシャを生んだが結核のためにレフィア・スルタンがまだ９歳の時に他界している。

　浪費癖では並大抵ではない父のアブデュルメジドは母親がいない分まで皇女の教育に金を惜しまずあらゆる手を尽くした。ピアノのレッスン、音楽の教育、フランス語、ペルシャ語、そして法律の教養。楽器においては練習用まで高級なものを用意し、教師陣も著名人を使い、もちろん語学の先生はネイティブだった。レフィア・スルタンは他の皇女のように１３歳という若さで結婚、しかも社会的政略結婚をした。相手は父方の甥のマフムッド・エドヘム・パシャであった。本人に選択や拒絶の権利などはなく、与えられる婿であった。婚約は幼年時になされたものであった。姉妹の皇女たちと同様に、幸せな結婚生活ではなく、この結婚はレフィア・スルタンの不運な人生が始まりであった。その理由の一つに夫のダーマード・エドヘム・パシャの浮気症が挙げられる。

　１８７０年、レフィア・スルタンはまだ２８歳の時に卵巣包嚢という病気にかかった。その病は死ぬまでの１０年間にわたって彼女を苦しめた。手術は計１２回施され最後の手術の３日後に彼女はこの世を去った。生涯の多くをイスタンブルのデフテルダールブルヌ宮殿で過ごした彼女はイェニジャーミーの中庭にあるハティジェ・トュルハン・スルタンの陵墓にて眠っている。

　レフィア・スルタンは賢く繊細で貞節を守り、博愛心の強い女性だった。犠牲祭の時に宮廷に仕える者達に施しをしたり、１８７７年の露土戦争で怪我をした兵士が戦争の結果その土地や祖国から離れなければならなくなって残ったムスリム移民の援助をし、その結果表彰されたという逸話も残っている。また、何かと筆を執り、数多くの手紙やメモを残した。宮廷女性と同じように買い物好きで、借金をしてまで様々な商品を買いあさった。それは浪費癖で有名な父のアブデュルメジド１世を怒らせるほどであった。借金の額も半端ではなかったが、彼女は返すつもりで借りていた。しかし、病にかかって回復するとこなく他界してしまったので結果的に踏み倒してしまった。*1

彼女の生涯は西欧の要素がふんだんに取り込まれ、皇女らしく優雅で教育も充実した反面、悲しい結婚生活と１０年にわたる闘病生活があり、４０年弱と短いながらも波瀾万丈だった。

本論文は前述の皇女、レフィア・スルタンの生涯を通じ、オスマン帝国の宮廷生活、特に皇女の生活をより具体的に明らかにすることを目的とする。西欧的要素が生活の中に入るにつれて、宮廷女性や皇女が社会的にどのような変容を示したかを考察する。何故なら、日本の明治維新でも西欧化があり、トルコの西欧化と時代が重なることから興味深いと思ったからである。また、西欧化が進んだ時代の動きを調べたいと思っていたからである。

今までこの人物に関する資料はないに等しく十分な研究が行われてこなかった。これまで様々な角度からM. チャータイ・ウルジャイ、ユルマズ・オズトゥナとメフメッド・シュレイヤが研究をしてきた。しかしこれらは人物像を明らかにする、手紙などの細かい資料がなかったために資料的な限界があり、十分ではなかった。*2 近年皇女の生活の詳細を示すトプカプ宮殿博物館の資料やドルマバフチェ宮殿の資料が公開された。そしてその資料などを基にAli Akyildizが“REFIA SULTAN”を出版した。本稿の目的を果たすためにこの本を軸に研究する。

本稿は全５章からなる。第一章では題材となるレフィア・スルタンが生きた時代、すなわち１９世紀後半のイスタンブルにおける西欧化の進展、第二章ではレフィア・スルタンの一生を誕生から死に至るまで人生を追いながら、皇女としてどのような扱いを受けたのかみていく。第三章では皇女の生活と西欧化を関連づけて述べたいと思う。

第一章：１９世紀後半の西欧化の進展*3

１９世紀後半オスマントルコはオスマン文化一色ではなかった。１８３９年から７６年にかけて進行した西欧的改革により帝国は西欧に開かれ、行政、司法、軍事の諸分野において改革が約束された。その結果イスタンブルにおける生活は突然変化を見せた。マフムート２世の時代（１８０８～３９年）から既にこの若い君主や、ムスタファ・レシド・パシャを始めとするタンジマート高官の周辺で西欧化への改新運動は始まっていた。また遡ればアフメト３世（１７０３－３０）の時代から既に西欧化への動きはあった。しかし、民衆レベルではこの時期にゆっくりと浸透していったのであった。西欧の生活の諸要素が模倣や流行のおかげで日常生活に入るようになり、外国人の服装や習慣を街で見かけるようになった。ヨーロッパ風の店、仕立屋や生地屋、化粧品やヨーロッパの家具を取り扱う店が増えそれらの店はクリミア戦争後、ムスリム民衆の立ち寄る場所となった。

男性のファッションであるフェズ（トルコ帽）はチュニジアから入り、イスタンブルのヨーロッパ側で盛んになった。クルバラシラーの記録によれば、イスタンブルで３０を越えるフェズの種類があり、長さや素材によって、更にその種類を増やしていた。初期はシルク素材が出回ったが、雨や風で痛んでしまうため、その機会を活かし、ユダヤ人の子供達が修理屋を始めた。そうして、フェズ型作り、クリーニング、型直しなどの新しい職が生まれた。１８６８年までにイスタンブルでは５軒の製本屋と帽子屋があったが、フェズ業者は１０軒も存在した。*4

１８４２年に外国の会社が国内に進出し、代理店を置き始めたころには、レスラーや手品師が街で見られた。裕福なエジプト人のパシャやベイ、女性たちがイスタンブルに来て定住したことは、西欧風の生活様式の流行がイスタンブルの人々に入ることに大きく影響した。また、少し後に始まったクリミア戦争により外国人との接触が多くなるとこの流れが非常に強まった。

マフムート２世の時代には宮廷女性が金曜と祭日のスルタンのモスクへの巡行に特別な宮殿の車で行き始めるようになった。今まで非常に穏やかで閉ざされていた女性の生活が、外に向かって開かれるようになったのである。彼女たちはハレム監視人を通し、外部で借金すらして立派な宝石を手に入れるのであった。ボスフォラス海峡の行楽は流行となり、中級の管理や職人も含んだあらゆる階層の人々が夏の家に出かけた。また、満月鑑賞会や音楽会も盛んに開かれた。

西欧の模倣は建築においては１世紀も前から始まり、他の音楽などの文化においても芽が育まれてはいたが、模倣レベルで創造に至らなかった。そして、ヨーロッパの宮殿や上流社会の生活や、儀式を真似ることであたかも西欧に近づいていると錯覚したまま、浪費の激しい生活をしていた。

人々の生活だけではなく文学も影響を受け、１８５０年から１９２０年の間は、イスラム文学は無視される傾向にあった。伝統を重んじるイスラム系の人々が認めない音韻のない詩が現れた。

君主や宮廷女性から始まった西欧の流行はイスタンブルでファッションとして民衆の間で見られるようになった。胸、腕、腰、肩、足を覆うフェラジェがコートのようなスタイル、地方や夏の家での前開き袖無しコートのようなものを羽織る女性、高官の制服の『イスタンブル風フロックコート』の発明はヨーロッパの流行を取り入れた例である。街で見かける外国人や、モスクへ巡行する皇女の車、最新のおしゃれをする宮廷女性はたちまち噂となって広がり、街の女性たちはこぞってその流行を追おうとす驍フであった。

このようにヨーロッパ風は時代の流行として、日常生活にとけ込んだ。特に一部の女性は取り憑かれたようにヨーロッパ人の真似をした。次にその時代、流行の先端にいたレフィア・スルタン（皇女）の生涯をみていく。

第２章：レフィアスルタンの一生

（1）生誕

スルタンアブデュルメジド１世の７番目の娘であるレフィア・スルタンは、丁重に扱われ育てられた。生後３日間は誕生の祭りがイスタンブル近郊でなされ、数多くの生誕イベントが毎晩大使館役人の屋敷や海岸、駅周辺、国家機関の前などでランプを灯し行われた。誕生の知らせはオスマン政府に正式に伝えられ、勅令がでて、ウレマーにより祈りが捧げられた。慣習である誕生日などの特別な日にちをアルファベットに置き換える Ebcet もなされた。レフィア・スルタンには、歴史家のアフメッド・ルフティ氏によって、『生まれてレフィア・スルタンになった光の満たされる（１２５７）』 の日付を与えられた。皇太子や皇女が誕生すると母后から贈り物や恩恵が与えられる伝統もあった。（ＲＳｐ．６～１１）

（2）教育－教育管理と授業

父のアブデュルメジド１世は母親が９歳で他界したレフィア・スルタンにもいい教育を受けさせようと最善を尽くした。読書をする年頃には、王子と皇女たちは、教育係に任命された教師たちの管理の下で授業を受けていた。最初の授業では儀式が行われ、そこでは聖句が唱えられた。レフィア・スルタンはこの伝統に相応しいものとして１８４７年９月２０日の日曜日に姉のファトマ・スルタン、妹のジェミーレ・スルタンと共に兄のメフメッド・ムラッドと兄弟のアブデュルハミトとハイダルパシャで行われた儀式でコーランの講読を始めた。

レフィア・スルタンの為に用意されたのは,アラビア語のアルファベットのテキストやアラビア語練習用コーランで、光り輝くダイアで装飾された表紙には花押が入り、真珠、金糸や絹糸で刺繍されていた。またビロードにローズダイアで飾られた丸い絵がメッキのかかった、大きな銀の書見台,真珠、レース,絹糸で刺繍された紫のサテンのクッション、一つはダイアと装飾のある金と他のシンプルな金,二つ目は三日月；ベルベットの上にレースの刺繍とレースのフリンジつやのある木の書見台は、金銀糸のフリンジがつき金糸で飾られたちりめんの掛かった低い読書机。金糸で出来たフリンジのついた生地で覆ったク

ッション、カバーは五個のダイアと装飾付きのブローチ、一つは金銀の刺繍,レースと絹の派手で細かく、金銀の刺繍のあるライラック色のカシミアの織物。一匹のチャボ,一足の靴はカシミアのショールに金糸で飾られた風呂敷があった。これらの品々はアブデュルメジドに贈答された。

レフィア・スルタンが受けた上等教育は、彼女が残した手紙の様式や正書法で失敗が目立たない程のレベルであり、内容の濃いものであった。自筆の手紙で読みやすい文章や表現を正しく使っていることからも良い教育を受けたことがわかる。

皇女は結婚後もフランス語を学んでいた。事実彼女に関する資料から,マリア・ティラルドという名前のフランス人の少女が宮廷で 1872 年２月付けでそれ以来 5 年８ヶ月程、月 6 オスマンリラ*5 の報酬でフランス語の先生として働いていた。レフィア・スルタンの宮廷ペルシャ語教師は別にまた存在し、定期的に授業を受けていた。教師の名はサイド・エフェンディ、彼は授業での購読用にシラズル・サーディの『ギュリスタン』という有名な作品などを購入させた。皇女用の宮廷内書道教師もいた。資料では書道の先生にアリ・エフェンディの名が見られ授業を行ったとある。書道教師は必ず皇女のそばにいて宮廷にいる他の人達にも授業をしたのであった。同じ資料でまた犠牲祭の子羊が与える人やその部門、つまり何を教えたのか不明な女教師が存在した。皇女の遺産の中から白い色付きの金メッキの説教師の演壇が出てきたことは、このある講師もしくは外から呼んだ知識人によって時々宮廷の人たちに宗教に関する授業がされたことを示す。

d．レフィア・スルタンの音楽の教育

アブデュルメジドは音楽の素養を身につけさせるために熱心になり,息子達にはヨーロッパから一人づつピアノの先生を呼んだ。子供たちに授業を受けさせるためにイタリアとフランスの教師を雇用した。アブデュルメジドのこの問題における行いと努力は息子のアブデュルハミトによって以下のように説明がなされる。

幼いころ、ピアノには興味があった。父は皇太子達にはヨーロッパから一台づつピアノを取り寄せた。宮廷にイタリア人とフランス人の先生がいた。この先生の中でフランス人のアレクサンドラ氏が私の担当に任命された。

アブデュルメジドはどんなに姉妹達の音楽教育においても,同じように娘たちに一生懸命に尽くした。それは定期的にレフィア・スルタンもテレセロミオという名のイタリア人

ピアノ教師の授業をとっていた事で証明される。この女性がミュニーレ・スルタンとアーディレ・スルタンの娘ハイリイェ・ハヌン・スルタンのピアノ教師であるので、当時宮廷でもイスタンブルの高貴な生活の中でも大変有名だったことになる。皇女には他に２人も宮廷に月謝を払って雇う音楽家が居た。それは民謡歌手のボゴスとサラバ・フランズだった。この音楽教師サラバは皇女が死ぬまで宮廷で職務を続けていた。この音楽家は皇女の最も重要な部下の役人で、給料が５リラだったことからも皇女の音楽教育への熱の入れようが分かる。

授業の他にサズの修理も、彼ら外国人教師たちの斡旋によってなされていた。ピアノはグラブオスキーという名の職人が引きうけていた。この修理の費用は宮廷の支出のかなりの部分を占めていた。宮廷にあるサズやピアノの一部は授業にのみ用いられた。つまりこれらは未経験の生徒が授業で稽古のために使うためのものであった。事実資料にある「宮廷待従の稽古のために買ったピアノ」の表現によってもこれを明らかである。また音楽の先生と歌手のサラバが修理された四つのフルートのうち２つが稽古用だった。こうして授業用,稽古用として買われたサズやピアノの一部は新しい生徒用とされたことが分かっている。皇女や皇太子は特に音楽の教育とレパートリーを充実させること、そして成長させられることにおいてお互いに教育し合い,また知識を交換していた。事実,皇太子のムラットが書いたと思われるレフィア・スルタンへの手紙からスルタン自身に行進曲の楽譜を望んだ事がわかる。皇太子はモンテクリストを読んだことと,物語のクライマックスに来たためにどうしても諦めることが出来ず許しを避けながら本を読み終えたあとに行進曲を書く説*, ハ世鬚靴燭里世辰拭

音楽家の皇女のために当時の宮廷や王家の領域生活で用意された場所の規模は皇女の遺産表にある楽器の多さからも分かる。皇女の死後の遺産帳には三台のバイオリン、二個のギター、二つのリュート,二個の真鍮のラッパ,ベルのセット,一台のフルート、一個の小型バイオリン,,二台の譜面台のうち一つは白い絹地で覆われ,金糸で織られた白色のもの、もうひとつは補助として二個のピアノ椅子 pelesenk（バルサム）のために金糸や真鍮の装飾のある四つの花押のある中くらいの長さのものがあり、バルサムの木で作られた長いサイズのピアノもあった。

この時代に宮廷と王家の生活からトルコの民謡音楽が遠ざかり,西欧音楽が特にスルタンの間や宮廷において広がったことが明らかになっている。楽器リストからトルコ音楽が皇女の宮殿において教育されなかったことが分かる。それは皇女の遺産帳でトルコ音楽に使う楽器の支払いの形跡に遭遇することが出来ないからである。以上のように皇女はその教育でフランス語と西欧音楽といった時代の二つの流行要素から多くの影響を受けた。これら二つの要素は,王家の生活においても非常に重要であった。（ＲＳｐ．１５～１８）

表１　人物相関図

Sultan Abdülmecid ── Gülcemal Hanım（第二婦人）

Edhem Paşa── Refia Sultan1842-1880　Ali Galip Paşa── Fatma Sultan1840

Mehmed Reşad Efendi1844

（３）婚約、結婚

１９世紀初期以前まで、皇女たちには年上の重要な政治家と結婚する慣習があった。２，３歳で婚約の例もあり、そのため若くして未亡人になるのだった。１９世紀になるとその慣習は廃され、思春期が結婚の最低年齢になった。*6 前述の通り、レフィア・スルタンは１３歳にて結婚した。レフィア・スルタンの結婚相手となったダーマード・エドヘム・パシャが陸軍少将の位を結婚後与えられたように、皇女の婚約、結婚相手にはその関係により将来の昇進が約束されていた。もし、婿の候補に結婚している女性がいたら、新しい婚約の後に既婚の女性と別れなければならなかった。結婚式には宰相やシェイヒュルイスラムや大臣が主席した。式ではコーランの言葉を読み聖句が唱えられた。式後、出席者にシャーベットと１５０リラが配られた。その他にも宮廷関係者に様々な恩恵が施された。トップバイオリニスト、書記長、副書記長、世話役達には毛織物や絹織物が贈られた。花嫁行列は国庫の世話役、宮廷の黒人宦官、召使い長、その他の役人と、音楽家の奏でる演

奏に迎えられた。宮廷の宮廷待従は車の両側で挨拶をしながら歩いていた。車から花嫁の部屋まで二列の絹の織物が広げられ、皇女はその上をゆっくりと歩いていった。黒人宦官は右手を額から口に持っていくテメンナという古い挨拶をしてから戸を開き、婿が車から降りる手伝いをした。嫁は慣習の通りに、車からはすぐに降りず躊躇を繰り返して婿を待たせるのであった。

花嫁は濃紺の生地に金糸、真珠、ダイアそして花で飾られ金糸、真珠のついたレース編みの腰掛け３枚布スカートを召していた。広い襟元、袖から見られる絹や毛で出来たシャツの襟元と袖口はレース編みだった。手には白い手袋、足下はロングブーツをまとい、ヴェールはエンタリと同じ色で細い生糸からなる覆いの上にエンタリのように飾られた。宝石類はアブデュルメジド１世が花嫁のために作らせた高価な王冠とネックレス、 胸当て、ピアス、腕輪があった。花嫁の髪飾りは金や星のついたものであった。羽の代わりにきわめて細く、白い毛が付けられた。宴のために総額１１６３リラ４４クルシュの宝石が売買された。

皇女の結婚においても、祝い事の七日目は yedilik と呼んで祝う習慣に則って、皇族と皇女たちに様々な贈り物が贈られた。事実、レフィア・スルタンの 7 日目にもプレゼントが配られ、姉妹のベヒジェ・スルタンにもダイアのブローチのプレゼントが贈られた。

レイラ・サズ*7 が雄大なものとして特色付けた宴は、ジェブデット・パシャの年代記の中では他の皇女の宴に比べれば冴えないものとして描写された。当時その報道がないため、詳細不明で、パシャの説明がさらに正しいものであることが考えられ得る。この豪華な宴が冴えないものと称されるならば、他の皇女の宴は想像を超えるものであろう。

婿のメフメド・エドヘム・パシャは海軍長と宰相職を勤めたダーマード・シェリヤール・メフメド・アリパシャの息子である。彼は結婚候補の宣言後に師団長に昇格した。この直後第三階級から nisani－ali に容認された。

（４）結婚生活

a.　デフテルダールブルヌ宮殿と家具

レフィア・スルタンが生涯の多くを費やしたデフテルダールブルヌ宮殿は王宮より小さい規模で類似した種類の職員がおり、その職員の数や職の種類はやや少なかった。

その様子は、以下のようである。広い埠頭が全面に広がり、庭には東屋のあるプールがあり、三方は大理石が敷かれたプールには大理石で出来た少女の彫刻があり、その口からは水が流れていた。プールのそばのくいの上に建物があり、二部屋と玄関、（ホール）、そしえ海岸があった。庭には松などの木が植えられていた。一階の玄関は手洗い場まで彫刻が続き、芸術家が作った水飲み場（チェシメ）があった。庭のそばには小さいバルコニーでもって通れる、水ためと鏡石と手洗い場があった。内部にガラス張りの部屋と着替え専用の場所にある安楽椅子がシルクの生地に覆われていた。（ＲＳｐ．105）
宮廷にスルタンが来たときに住むために４つ、ないしは６つの海に臨んだ皇女の部屋があった。階段も同じ部屋に大きな玄関の２つの角から一つずつ門と共に通行させた。

レフィア・スルタンの花嫁部屋は、スルタンの部屋のそばにあった。天井は高く濃いピンクの油性絵の具で塗られ、メッキの装飾がなされた大きな部屋であった。部屋の家具については宮廷に仕えた者の証言から知ることが出来る。

二つの隅に小さな木の寝台の上に置かれ、一つずつその後ろに高く表面は天井のある大きな椅子、正面と側面には一つずつソファ、２つずつの椅子と大きな肘掛け椅子があった。カーテンは青との右近で、その間に絹の上に奇異と胃する間の葉っぱや、花が織られた地元の織物だった。このカーテンは重く、適度なひさしや房飾りで飾られた。ソファ一式、鏡、洋ダンス、大きな中央のテーブル、黄色い金箔付きの鏡の前には時計と二つの花瓶、天井には大きなシャンデリア、一対の蝋燭立て、中央には花瓶、天井の大きなシャンデリア、廊下に豪華な燭台があった。

レフィア・スルタンの遺産帳から家具についても分かるこのリストを研究すると、スルタンがこの宮殿を完全に西欧の様式で家具を装備したと分かる。事実、三脚テーブル、カーペット、肘掛け椅子、背もたれ椅子、テーブル、洋ダンス、鏡などすべての家具が皇女のヨーロッパ趣味を印象づけていた。また、有名なトルコ絨毯の代わりに、ヨーロッパの工場で作られた物、特に英国製の小さいカーペットを購入した。

前の時代の質素な家具や生活経験の代わりに、感性や外観に重きを置く新しい考え方が支配し始めたのだった。また、皿、コップ、磁器製コーヒーカップの金属の容器、盃、ポット、フライパン一式もヨーロッパから持ち込まれた。
この時代において、調達品、家具、ガラスと磁器の食器が流行った。品物の生産地は、パリ製、（paris-kari）のように記された。

皇女の使った品物はオリジナルの物で、グラスや皿の表面にはレフィア・スルタンと書かれていた。また、遺産帳に載っているいくつかの品物は今日でも著名である伝統のある品々で、同様に１９世紀後半から既に使われていたことを示す。事実、中国の扇子、日本の磁器、ブルサのタオル、ギョルデスの絨毯はその時代で有名になり選ばれた（ＲＳｐ．１０７）。

b．チャムルジャキオスクと他の不動産

レフィア・スルタンのデフテルダールブルヌ宮殿の他に、ベイレルベイにある宮殿と、チャムルジャキオスクがあった。何故なら、資料では『ウスキュダル、コシュヨルでレフィア・スルタンが新たに建設なさる王家の城』と定義されているからである。そのキオスクは、ウスキュウダルのコシュヨルのトプハネリオールにあったと知られているが、我々が現在その場所に行っても記録通りにチャムルジャキオスクには遭遇しなかった。おそらくこのキオスクは確実に壊されたか無視されて消失してしまったようである。

記録上ではおよそ１１１６平方メートルの敷地で、１１１８６リラになるとある。建設後すぐに修理もされている。建設、修理の監修はハジュ・ムグルドゥチュ・カルファ（女官長）であった。チャムルジャキオスクの建設が完成すると、新しい家を造った者にプレゼントをする伝統がなされた。メフメッド・レシャッド・エフェンディはキオスクの部屋に置くために、ベイオオルのＧ．Perpignany'ye の系列店のメーブル商店での家具と装飾品店で安楽椅子を作らせ、姉妹のベヒジェ・スルタンは新しいキオスクのために、ペアの蝋燭立てを贈り、レフィア・スルタンを大変感動させた。彼女の死後、このキオスクはスルタンの不動産に含まれた。（ＲＳｐ．１０８～）

以上のように、レフィア・スルタンは経済的にも市井の人とはかけ離れたヨーロッパ風の家具を多く取り入れた豊かな暮らしをしていた。

３．宮廷内事情

ｂ．宮廷職員

職の一部は、レフィア・スルタンの夫、ダーマード・エドヘム・パシャ特有の召使いだった。宮廷職員を確定することは不可能である。

主な職を挙げると、ハレムのアー、雑用係、会計係、コーヒー係、女僧、蝋燭係、、門番、ボート漕ぎ係、４３のカルファ（女官長）、ハレムのゴミ係、石炭係、などの日常生活にまつわる係と皇女のペルシャ語教師、礼拝導師、ミュエッジン、医師、船漕ぎ係、蹄

鉄工土管鉄管の水路直し係、馬丁、ブドウの生産者、庭師まで存在した。全ての宮殿に皇女の女奴隷と女僧のような女性の召使いがいたわけではない。この資料から予測すると１００を越える職が存在したようである。（ＲＳｐ．１１２）

職員には給料の他に月々の割り当てもあった。それは職員の在任期間、重要度、偉大さによって量が変わった。毎月石鹸、下塗り、砂糖、油、スポンジ、香料付き石鹸、ほうき、コーヒー、蝋燭、綿製品といった消耗品であった。

宮廷職員の他に、在任期間や地位、偉大さにより、宮廷の台所から決まった量の食料が与えられた。４種類の食物があり、金属製の浅い鍋（sahan）の単語は計量カップや食べ物の種類を表している。

料理は、カルニアルック、ドルマ、野菜と肉の盛り合わせと様々であった。種類はsahan で表され、甘菓子も同様に記述された。料理と菓子は別々の領域になっていた。一食の構成は一種類の料理にパイ、菓子、エクメッキの組み合わせが典型であった。牛乳は皇女限定の品である。つまり資料から分かる限り、牛乳は皇女のみに買われた。実際、皇女に関する書類からその受領書もあった。料理は個々に支給されるのではなく、受け皿や盆のようなものに乗せて、場所ごとなどまとまって渡された。

エクメッキは大小の２種類があった。皇女の召使いたちにあったエクメッキ係の仕事は買い、配達することだった。エクメッキはバシュ・アーの調達能力に左右された。
この他に毎年ラマザン月に、スルタンによる、皇太子、皇女、母后、王宮にいる人たちへ分け前があった。１８６３年3月５日には恩恵のために、奉仕者たちと職員に５０リラが贈られた。（ＲＳｐ．１１５まで）
前記のレフィア・スルタン個人にまつわる情報の他に、これから宮廷での西欧化、買い物、借金の関わりを取り上げる。

（５）収入

a.給料

レフィア・スルタンに財政から１０００リラの給料が支払われていた。１年も経たぬうちにレフィア・スルタンの給料は父のアブデュルメジドの１８５８年3月２３日付の許可で１５００リラになった。この昇給はインフレで貨幣価値が下落した結果起こったもので、後に貨幣価値が戻ると減給となった。

給料の他にも給付金があった。月々の分割払いで６５リラ２１クルシュといった大金であった。この合計金額がいかに多いかは皇女の宮廷召使の給料の合計金額が７１リラ２０クルシュであることを見ればよく分かる。

アブデュルメジド１世の時代が始まると、１８７７年から７８年の露土戦争がもたらした富と兵士の破滅による財政危機から皇女の給料も支払われなくなった。皇女は自分の給料を徴収できないので部下も給料を得ることが出来なかった。このため、レフィア・スルタンの給料の保証をスルタンに申し出て、命令が出た。このためにサドラザム・サーイド・パシャに二日後半分の給料が与えられることが宮廷に知らされた。皇女が死んだときに財政国庫からかなり高額の給料があったことが明らかになった。（ＲＳｐ．１８）

b.その他の手当

皇女たちは給料の他に割り当てが与えられた。与えられた物やその量は皇女の年齢や文化の状態に、つまり既婚、未婚や年齢によって変化した。スルタン達の給料の代わりに公共の歳入を賃貸することでの収入がなされたタンジマット以前の時代では割り当ての量に違いがあった。タンジマットの直前の時代では役人達を給料でつなぎ、収入も国庫に含まれたのであった。タンジマット後はスルタンたちや他の役員達に与えられた割り当てはまだ同じであったり、有料の現金として与えられた。スルタンたちの日当として冬用の薪や石炭もあった。別に肉や蜂蜜,犠牲祭用の羊,雪や氷の支給もあった。この雪と氷は作業場のによって何匹ものラバで山々から運ばれ、公務員達、水、浮浪者の収容所とスルタンに配られた。イスタンブルに運ばれた雪と氷が守られるためにエユップの辺りにある雪と氷の集める場所に置かれその上を藁で覆った。その後おそらくアブデュルハミト二世の時代に技術発達のために関連するものとしてボモンティ兄弟が宮廷の雪と氷の確保のためにフェリキョイに工場を作った。（ＲＳｐ．20）

皇女たちはその他に毎年,夏,年始,11 月と犠牲祭といった特別な時,金の支出があった。この伝統は政府の滅亡まで続いた。イスラム暦で年始に当る 1 月にスルタンが訪問され、祝いの式典がなされる時に赤いサテンの中にいれて皇女たちに渡された。例えばメフメッド・レシャッド・パシャの時代、その額は１０クルシュだった。皇女たちも自分の部下達に金を振るまった。また毎年ラマザン月に朝食に向くものの名の下に自分でコップ,スープ皿,オリーブ、野菜の漬物、シャーベット（シロップ系のジュース、割礼の時にも出さ

れる）、ガム,キョフテ,鶏肉,種無しブドウ、無花果,魚と卵,アゾフのキャビア,オリーブオイル,紙,スポンジ、弁当などが与えられた。

このように莫大な収入が保証されていた皇女は、その金を余すことなく、買い物熱に費やした。浪費で有名な父、アブデュルメジド１世の血を引き、その父を激怒させる程の金遣いの荒さをこれから紹介する。

（６）皇女の支出面

ａ．　買い物

高額の支出を、借金の山を生み出すもとの、買い物について紹介しよう。その買い物システムは商店を訪れ直接選ぶ現在の私たちとは異なっていた。宮廷女性は直接商店に足を運んで買い物をしない。富や家具の買い物は男達を遣ってし、もしくは商人たちを家具の見本を持参させ宮廷に呼び、実物を見た。なぜなら皇女たちと宮廷女性たちの直接交渉は宮廷の規則に違反していたからである。*8 買ったものは品物のリストの紙に書かれ、男達に渡された。生地の女性用の品物が本人に確認される前に注文された。その紙はまずハレム長に渡されその後に、職員に届いた。１,２日後注文された商品が包装された包みの中に入り注文書と一緒に届いた。皇女はこの中から気に入ったものを取り、残ったものは返品された。この方法のために支払う額は自然と高くなっていった。（ＲＳｐ．４６）

毛織物や品物の注文書にはレフィア・スルタンの手紙で使われたラテン文字の『Ｓ』があった。例えばわれわれの手元にある、この注文書は明記される生地が売買される為に皇女のコーヒー係に渡され、生地が大臣から承認されるのである。この様々な仲介人つきの買い物で気に入られなかった商品が返品されるとその代わりに新しいものがもってこられた。事実このような状態でレフィア・スルタンが購入した二つのフランネルシャツが返送されその代わりに二枚の別のシャツを持ってこさせた。

宝石類は扱いが異なっていた。皇女は宝石の形やデザインをペンや紙を用いて絵に書いて、宝石商に注文した。ピアスの絵の横に『上にある大きな真珠と真鍮の大きな真珠の周りに３つずつのダイアと三つずつの赤いルビーをつけて、この絵のように。その場所ごとに真珠を、５つの真珠から１０個に。』と書かれたメモがある。このように記入の横に絵も描いてピアスが自分の要望に適して作られるよう望んだ。（ＲＳｐ．４７）

表２　　遺産帳や宝物のリスト

スルタンアブデュルハミドに紹介されたレフィアスルタンの宝石類リスト（ｐ.１０３）

宝石の種類	個数
ダイアの一つついた大ぶりの指輪	1
赤真珠母のスプーン	3
象牙製スプーン	2
8 つの真珠がある一組のダイアのピアス	3
10 個の真珠つき青いルビーのブレス	1
真珠のネックレス	1
41 個のダイアのついたネックレス	1
16 個の石がつき真ん中にエメラルドのついたネックレス	1
ダイアのネックレス	1
大きなエメラルド	1
大きな円錐型のルビーの指輪	1
上部に赤い石のついたクリスタルペアグラス	1
上部に赤い石のついた銀製ペアグラス	1
青いクリスタルルビーのついた真珠のネックレス	1
宝石付勲章	1
フランス風エナメル製桃色ダイアの金属コップ受け	1

鎖時計	1
金の鎖の上に 5 個の指輪のダイアの石	1
垂れた形のペアのダイアピアス、真ん中に指輪風の独立した石	1
ブリリアントカットのダイアのブローチ	1
ブリリアントカットダイアのついたロケットペンダント	1
ダイアのピアス	1
ダイアのブレスレット	1
宝石のついた勲章	2
ダイアのブローチ	1

b. レフィア・スルタンが買い物をした商店

上のコレクションを見ても彼女が贅沢品を好むことが分かる。皇女は必ず服を新調する際に、宮廷の仕立て屋に生地のサンプルを持ってこさせ選んでから注文するという方法をとっていた。衣装代や靴の支払いが月々の予算のかなり多くを占めていた皇女の支出は遺産帳から実証される。彼女の遺産帳や残っている領収書により、なじみの店がわかっている。以下にまとめた。（ＲＳｐ．53～56）

表３　目的別利用した店一覧表

|

種類	店名・人名	購入商品・支払い金額
車	セフィリ・ジェミル	乗用車と馬の部品 5365 フラン
車	ポーレン商店	車の代金として 320 リラ
写真	アブデュラー・フレール ヴァシラキ・カルゴポイロ	80 枚(ペルシア語教師、宮廷侍従など)の写真、149 リラ
女性仕立て屋	ミル＆コテローやアルバートクン	洋服、ネルシャツ、靴下、マフラー夫のためのガウン、ハンカチ、手袋
家具	C.Bailly	宮廷の鏡、修理と金メッキの作業で計 62 リラ
生地	A.La.Ville de Paris	服の手直し
衣服	Mille et Cottello	パリ、ロンドンの衣装
裁縫屋	ロセンシャル	
アクセサリー	アレンコ	
ガラス製品	サクシニアジュ・マルディック・クラクリアン	水差しや酒杯、杯、皿、底のあるカップスープの皿
衣装屋	ノイバルパル	から買った銀時計のために計 90 リラ
	ガポラ・サクソニア	4 人用甘菓子、75 リラ
楽器／音楽機器	Maison des piano du Musique	
裁縫屋	バルバリジョ／エレニマダム	

こうした金額を現在の額に置き換える指針は宮廷の食事にある。宮廷一月分の食事代は平均約３１２，５リラであった。奴隷は当時一人２５０リラで売買された。事実レフィア・スルタンは 1858 年 11 月 4 日付で買った奴隷に２５０リラ支払っている。奴隷の値段はその歳や能力によって変化した。

チャムルジャキオスクで働く人の日給は１５クルシュ、キオスクの予算は合計１１１８６リラであった。このことは上でわかった数字を現実化でき、手助けとなる最も重要な数値である。何故なら労働者の日給が最も有力で重要な水準だからである。推定結果は以下の通りである：チャムルジャキオスクの支出計１１１８６リラ、一人の労働者の日給の１５クルシュを頭数で割ると、７４５７３人の労働者の日給が財産から出ていると分かる。１９９８年２月現在の平均日給はおよそ３００万リラなので、今日の数字でキオスクの財政はおよそ２２４０億リラになる。*9（ＲＳｐ．５７）

夫婦の会計は別々にしてあった。レフィア・スルタンの月々の食費は約３１２５リラで、その額の半分は夫のダーマード・エドヘム・パシャが支払っていた。年間の食費を見ると２，３，４，９，１０月が少なく１２月は必ず多かった。この状態が例外のないものとしてこれらの月々の台所の支払いメモにおいて同様である。この点は,婿の皇女に対して状況を明らかにする点からも重要である。国家役人のように、給料や支払いの存在する皇女は経済的独立を勝ち取ったと見られていたが、それでも皇女たちの結婚や生活における社会的従属はかなり強いものであった。

ｄ．皇女の借金

皇女には宮廷からの十分な給料、割り当てや手配費があったが、贅沢品をごっそり買うためその金を維持できなかった。レフィア・スルタンの予算も明らかになったが、担保見返りと高い利子で借金せざるを得なくなった。レフィア・スルタンの借金は３０万リラであった。借金の明細からその原因は贅沢品の買い物だとわかっている。アブデュラズィズ１世、ムラッド５世とアブデュルハミト２世の時代における政府の借金は、一部はこうした皇女たちの贅沢品の消費の影響だとも言える。

アブデュラズィズの時代で役員報酬が支払い不可能という最悪の状態になった。財政から給料がでる皇女、皇太子や母后も給料が支給されなかった。このために日常の支出のために外部から借金をしていた。何人かの皇太子と皇女は７ヶ月、皇室ではアディーレ・スルタンが４ヶ月、姉妹のジェミーレ・スルタンも５ヶ月分支払われなかった。この点においてレフィア・スルタンも１８６６年１２月から１８６７年２月まで四ヶ月分の給料が支払われなかった。皇女は支払いのため二回も政府に申請し、コンヤ、トラブゾン、アマスヤ地域の収入から給料が支払われる決定をさせたのだった。給料がこのように支払われない状況で宮廷のありふれた浪費に対立するためにレフィア・スルタンも他の者のように市場から借金をする道を選んでいた。

表４借金を借りた人物と金額（一部）

人名	借りた金額(単位：～リラ、～クルシュ)
給仕係長アフメットエフェンディ	948, 11
綿打ち屋	1677
男性舞踏家の息子に宝石代金として	36465
テルズィ・レビ	167, 70
市場内の服飾屋	2296, 4
宝石商シャヒン Jr.	8031, 30
仕立屋大銀エンダゼ	1906, 35
マルイェン婦人	4750
皇女の綿打ち士、ハフィズエフェンディに買ったネックレス、シルクの生地の代金	1500 1000
ペトロという銀行から利子付の金	11500
マルイェン婦人から購入した毛皮代金	3953, 50
計	74195

（７）病気治療　　レフィア・スルタンが病気がちだったこと、そのために伝統的治療法が試されたこと

a.　手術や西欧、イスタンブルの医師による治療

レフィア・スルタンは慢性の頭痛持ちでもあったが、若くして彼女を死に導いたのは他の病気であった。１８７０年、レフィア・スルタンはまだ２８歳の時に卵巣包嚢という病気にかかった。卵巣に水が溜まり、気球のように膨らんだ袋に穴をあけて、手術の度に１３～２８kgもの溜まった水が抜かれた。

１８７５年以来５年間で６回、１８７９年４月に６回目の手術を、そしてその後の８ヶ月で６，７回の手術を受けた。

彼女の治療に携わった医師は以下の通りである。イスタンブル在住の医師が特に多い。ベイオールのフィリディス、ホラサンジュオール、ウスキュウダル・イジャリーのディヤマンドリ、チャムリマンのカスヨ・ソパ、ジバリのパブラキ、婦人・小児科医のメネトレイ、病理学専門医のベドナワスキ、イエメン人医師エル・ハジ・メフメド・ジャーミル、そしてS.プロリアが皇女の治療に協力した。

Ｓ.プロリアは長期にわたって訪問診察を行い、少なくとも２日に一日はレフィア・スルタンを診察した。診察料は１回１リラかかっていた。イスタンブル在住の医師から外国人医師によるあらゆる治療を試された後、アブデュルハミト２世は最後にヨーロッパの様々な国から有名な医師を呼んできた。１８７９年１２月１４日には、デフテルダールブルヌ宮殿にてヨーロッパ人医師と主医のバフィディによる最後の会議が催された。共同のレポートで、難しい手術であるために、手術によって体の抵抗力がなくなり、大変危険であるが、皇女の回復のため手術を要求するという内容であった。その危険な手術がなされるために、許可を取るため医師のうち２人は皇太子のケマレッディン、皇女の実の兄弟メフメッド・レシャッド・エフェンディに送られた。皇太子も同意し、医師に感謝した。アブデュルハミト２世は手術に万全の体制で挑むために、ヨーロッパから呼んだ医師の他に、地元の腕利きの医師も、手術に向けて準備するよう命じた。手術に加わる医師には報酬が約束された。

不治の病ゆえ、彼女が服用した薬は強いものだった。痛み消しのためにアヘンが用いられたり、痩せる効果のあるものもあった。処方箋に載っている薬は桃の種、英国の塩、バラ酢、カラシナ、魚油、精製油、ペパーミントがあり、主にオルタキョイのN.アペリー薬局やガラタのＨ.マデッラ薬局で用意された。（ＲＳｐ．８２）

b.　伝統的治療

トプカプ宮殿博物館に存在する特別な資料の、薬の調合の仕方は、皇女がイスタンブルの医師による治療や西欧医学を試しつつ、民間療法も利用していたことを示す。その調合法のいずれが彼女に使われたかは明らかではない。

薬の一つは、エジプシャンバザールで買った７種のガムとの黒い根を一緒に砕き、およそ２kgの乳牛の牛乳と鍋に入れ、混ぜ、ガムのように伸びるまで煮立てる。しかし、この薬が使われた処方箋は見つかっていない。

二つ目はパセリ、なすと牛乳は一緒にのり状になるまで煮立て、これを皇女の腹に湿布するのであった。また、黄色い牝の牛乳はナツシロギクと煮立てて、水蒸気がでるまで待ち、他に湿布を腹にまいた。他には、らくだの糞、ナツシロギクと牛乳を煮立て湿布を腹にする物もあった。

他の調合によれば、三日間ブドウ水を飲み、また６５０グラムのナツシロギク、純粋な乾燥バラ、なす、純正バラ水を一緒に煮込んでよくかき混ぜたあとに裏ごしをして出来た糊状の物を暖かく腹部に湿布する。その糊の表面にある油分をとって腹部にのばし、その油の上に糊状のを置くことが重要であった。２４時間放置した後、翌日の夕方塗り替えて、その行為は３日間繰り返される。

メレック・ミサルという人物は個人的に試した結果を書面で皇女に伝えている。手紙で、その時代の社会でのどうしようもない病気には、医師、最新の薬、先生と民間療法の４つの要素が必要であると述べている。そして、調理師である妻も皇女と同じ病で２年近くこじらせ、上記の四種類による治療を行って、最後の薬で回復したと説明している。提案する薬はこのように適切である。ひとつまみの塩を水をカップ少しでぬらし、やかんの中に置かれたセンナを煮てガーゼでこしたあと、センナ水を塩の上に注ぎ、これを腹部に湿布し、就寝時に飲用する。

また他の薬の調合は、レモンの黄色い皮を細かく剥いたあとその下の白い皮がおろされたものとガーゼの上に置かれた薬を少し暖めておなかの上に巻くことが必要であった。またその周りにレモン水と塩を延ばしておくことも重要だった。

一匙のごま油、蜂蜜 、ギリシャコインほどのネズミの糞をカップに入れてよく押しつぶした後、ぬるま湯を注ぎ、出来上がりというのもあった。

他にも多種多様な合成薬があるが、果たしていずれをレフィア・スルタンが使ったかは明らかでなく、参考程度にとどまる。（ＲＳｐ．８３）

ｃ． 精神的ケア；皇女の預言者と高名なウラマーへの懇願

皇女の不治の病に手だてが見つからないために、最後の手だて、高名なウラマーに精神的な援助を申し出ることにした。彼女は著名なハレヴェティ教団の中のシュンビュル派のシャイフ、シュンビュリエ氏に手紙を書き、メンタルケアを求めた。皇女は宗教的なことも配慮し、アラビア語の文体で、懇願した。また１０回目の手術の前に、イスラム教団の長に書いたと分かる他のトルコ語の文体で、請願書を出し、頼み込んだ。そして預言者や，アッラーの神にも，静かな祈りをささげ，請願書を書き頼んでいた。

皇女の健康を取り戻すために、祈祷師を雇っていた。その祈祷師は一週間朝も夜も聖句を唱えていた。

病気回復のためならどんなこともいとわない皇女は，実行に移すのが困難な約束までしていた。また、オスマン帝国の歴代スルタンや知り合いに援助とコーランの読了に関する約束を手紙でしていた。また聖者の墓への参詣も約束していた。（ＲＳ　ｐ．８６～）

（８）死と死後の借金

ａ． レフィア・スルタンの死、葬式

前述の治療や彼女の努力は残念ながら功を奏さなかった。最後の大手術のあと容態は次第に悪化し、手術の２日後夜３時に急変し、薬がベイオールから運ばれ、３人の医師が駆けつけた。そして翌日、すなわち１８８０年１月４日夜彼女はこの世から去った。

彼女の死体は船でシルケジに運ばれた。常備軍と憲兵が喪に服しながら歩いた葬式の行列には全ての大臣、政治家、軍隊司令官、ウラマー、シェイフ、聖地メッカ・メディナからの人々にメヴラーナ教団員が参加した。（ＲＳｐ．９２）

レフィア・スルタンが病気から回復する願掛けをした手紙において、「健康な身体状態になるときにコンヤへ一人の男性を送り、歳をとった聖メヴラーナに７日間読経を終えて蝋燭をつけ、ショールをプレゼントしましょう。」の文章がある。これは自分が聖メヴラーナに関連する教団員である暗示である。この暗示は皇女が死んだ時葬式にメヴラーナ教団員が加わったことで更に意味を強めた。新聞の文章では他の宗派ではなく本当にメヴラーナ以外の何物でもないと述べられた。皇女がメヴラーナ教団員との関係を強める他の証拠はない。（ＲＳｐ．38）

b.　死と金銭の関係

レフィア・スルタンが亡くなり、彼女の１２５０リラの給料がナイーレ・スルタンとメディハ・スルタンに移った。*10

第２章（６）支出の項でも述べられた皇女の借金は死ぬ前に返還されず、３０万リラの借金は大問題になった。残っている皇女の遺産帳は債権者の大半は女奴隷、召使いであったことを示している。皇女の死から２８年経過しても、これらの人たちの債権は未だに支払われなかった。毎週金庫から１００リラずつ支払われ、この借金が清算されることが提案された。その決定は１、２週間実行された後中断し、忘れられて何年も経った後に新しい提案がされた。

この状態は第二立憲政治時代まで続き、借金は清算されたことにされてしまった。レフィア・スルタンが死んだときに借金に担保を与え、上記の宝石の一部をスルタンが望んだために、アブデュルハミト２世に提供した。アブデュルハミトは死んだ姉妹に関するダイアなどの宝石を保管した。立憲政治の後、この宝石遺産委員会によって取られたノートは、国庫によって皇女の親の兄弟である新しいスルタン、メフメッド・レシャッドに示された。更に後、関連した書記長のハリッド・ズィヤーの承諾で、このノートに豪華な品物と宝石が売られて借金が支払われるため、品物に関する裁判が行われることを保障するため、ノートが国庫に送られることが指示された。このノートによればアブデュルハミト２世に紹

介された品物と宝石は表５で詳細が与えられている。１７種類の３０アイテムであった。（ＲＳｐ．１０２）

表５　レフィア・スルタンの債権が借金に対して信用金庫に担保に入れた宝石の種類、量、換金の値段を示すリスト

換金値段(リラ)	個数	品物、宝石の種類
400	1	ダイアが一つついた大きな指輪
15	3	バラ色ダイアつきフルーツ用スプーン
21	3	バラ色のダイアがついた真珠母のスプーン
70	2	象牙製スプーン
240	1	8 個真珠がついたネックレス
220	1	10 個の真珠、青いルビーがついた腕輪
498	1	真珠つきダイアのネックレス
490	1	41 個のダイアがついたネックレス
200	1	16 個の石がつき中央にエメラルドのあるネックレス
55	1	ダイアネックレス
120	3	環状ダイア pinse
100	1 ペア	滴型ダイア
10	1	大きなエメラルド
35	1	大きなルビーの指輪
27	1 ペア	バラ色ダイアが底についた水晶グラス
30	1 ペア	バラ色ダイアが底についた銀のグラス
490		真珠のネックレスの表面に青いルビーがついたもの

死後３０年経っても皇女の借金は未払いであった。借金や債権者の多くは被害を受け困り果てた。皇女が健康で、借金をした時点ではかなり忠実な人物であったことが手紙から分かる。皇女は借金の支払いの保証人に巡り会うまで苦労したと残っている手紙から分かる。しかし、借金は支払われなかった。また宝石は、皇女の借金を引き受けない当時のアブデュルハミト２世の分け前になった。（ＲＳ　p.104）

第３章：皇女の生活と西欧化

レフィア・スルタンは市井の人々より、西欧文化に触れていたと言える。誕生や結婚といった儀式的なことでは西欧化の影響はなかったかもしれないが、住居、教育やファッションにおいては西欧寄りであったと言えるだろう。生活の中心である衣食住に次々とヨーロッパスタイルが入っていた。時代の流行を追うと同時に皇女という立場のため、宮廷女性と共にイスタンブルの女性たちにも情報を与えていた。

彼女は西欧文化に違和感を感じただろうか。フランス語の教育やピアノの教育は初めはコーランの講読同様与えられた物だった。大人になるにつれて意志で行動するものだが、性格を形成する幼少期に西欧に対応した教育や西欧音楽に囲まれて育ったので、借金同様それらは自然な存在であった。

一方社会では「近代化をすると、ウラマーの反対に遭う」という、西欧近代化 vs イスラムの対立（トルコ語で言う ikilik）が起こり、西欧化の導入に障害はあった。　西欧化は、ヨーロッパ諸国の軍事的・政治的圧力に抗し、国内での中央集権強化のため、つまりは帝国の永続のためにとられた手段である。*11 物事の順応の限界は非常に難しく、またメリットとデメリットが西欧化では大きく分かれた。しかし皇女は西欧的要素の導入で当然困ることはなかった。むしろ選択の幅が広がり好都合だった。特に病気の治療においては、近代的治療、手術から祈祷に至るまで施され、自身が高名なウラマーや、預言者、アッラーの神に懇願していた。彼女が祈りを捧げ懇願するといった宗教的に熱心な態度を示したのは発病後ではない。皇女はもともと貞節を守り、宗教心の強い女性であった。

皇女が西欧的であったかの判断は難しい。何故ならヨーロッパの宝石や服、車の購入は彼女の趣味であるが、宗教を大切にする面も濃かったからである。

皇女が生きた時代はまさに近代的人物を作るために、国自体が動いていた時代だとも言える。フランス語で授業を行う学校の設立や、商法や刑法をフランスの法を翻訳し、用意したことはその例である。*12

皇女の写真にはヴェールがかかっておらず、音楽の好みも西欧向き、そして食費は夫と同額という事実からも彼女は想像以上に近代的な女性であった。皇女だからこその行き届いた教育は彼女の友好関係に非常によい影響を及ぼしている。残った手紙の宛先はエジプト人総督の娘や、高名なウラマー、時にはアッラーの神であり、フランス語で書かれた手紙はないが、幅広さを感じさせる。病気の際の治療も選択の幅が広く、回復には至らなかったが良い影響を及ぼしていた。

このように皇女の生活自体に西欧の要素が数多く存在したので、レフィア・スルタンはカジュアルな西欧化をしていたと言うことが出来るだろう。

おわりに

皇女の年収は１２５０リラ、日本円にしておよそ１３，８５０，０００円、チャムルジャキオスクの職員の年収が６０万円として比較すると、それはさらに巨額である。しかし、皇女は年収の２４，０００倍に当たる額の借金をしていた。遺産帳に合計５６８１の品物があるのも無理はない額である。そのしわ寄せが来たのはオスマン政府だった。宮廷女性の浪費、借金地獄や公共建築の乱設がたたって、借金が返せず帝国は破産宣言までする事態に陥った。消費欲を煽った西欧化にメリットはあったのか、という疑問さえ浮かんだ。

しかし、皇女の生涯を覗いた結果決して買い物や流行だけが、西洋的要素の導入ではなかった。彼女の生活から分かる限りでは、可能性が広がり、西欧化は好影響であった。本稿はレフィア・スルタンの生涯から当時の西欧化の進展具合を明確にする目的で書かれた。一般的な生活を送る私自身が想像した皇女の生活は、遠く近かった。何故なら彼女の幸せは健康や恋愛に左右されたからである。大きく異なるのは彼女を取り巻く環境である。結婚相手は選べず、皇室の行事もあったが、給料、割り当て、豪華な宮殿を与えられることで特に財政面で異なっていた。もしレフィア・スルタンが幸せな結婚をし、病気知らずの健康体で、長生きをしていたら、不自由のないお嬢様として私の目に映り、限りなく遠い存在に思えただろう。しかし、好奇心豊富で、筆まめで衝動買いをしてしまうところは、恐れ多いことだが似ていると感じた。

本稿は彼女が残した手紙や買い物メモをもとに行われた研究を利用したものである。皇女の生涯は知ることが出来た。資料も十分でない他の人物、他の皇室の人物から一般人についてはまだ研究がなされていないので、この研究をより効果的にするためにも今後比較研究をしていきたいと思う。

参考文献

Akyildiz, Ali, Turkey,REFIA SULTAN ,Tarih Vakfi,Istanbul１９９８
Ahmet Hamdi Tanpinar ,XIX.Asir Turk Edebiyati Tarihi,2.Baski,Istanbul,1956, p99-104
John Norton、“Faith and Fashion in Turkey”,Nancy Lindisfarne-Tapper and Bruce Ingham, Languages of Dress inthe Middle East,1997 p.154~155

中山紀子「アチックとカパルートルコにおける世俗化、イスラーム、女性」『民族学』５９巻４号１９９４．４５４頁）

永田雄三、加賀屋寛、勝藤猛著、『中東現代史Ｉ』山川出版社１９８２年、７５－９５頁
アレヴ・リトル・クルーティエ著、篠原勝訳『ハーレムーヴェールに隠された世界』河出書房新社１９９１，ｐ．６２，１０９